

ロマンシュ語における助動詞の選択性

— スルセルヴァ方言とヴァラーデル方言
を対照して —

坂 口 友 弥

1. はじめに

本稿では、ロマンシュ語ヴァラーデル方言¹⁾の自動詞の迂言法過去時制における助動詞 HAVE と BE の選択性を考察する。この助動詞の選択性は、Split Intransitivity²⁾と呼ばれる文法現象である。本現象は、自動詞の迂言形式によって過去が表される際に、現れる助動詞が一つではなく、二つ以上表れることを指す。

助動詞を比較する際の理論の枠組みとして、先行研究 Sorace (2000) 及び Legendre (2007a)³⁾の助動詞の勾配 Auxiliary Selection Hierarchy⁴⁾を参照する。ASH は通言語的な助動詞の分布⁵⁾の傾向を示したものである。坂口 (2014)では、ロマンス諸語に属するフランス語、イタリア語、ロマンシュ語スルセルヴァ方言の三言語を比較対象として、助動詞の勾配を比較し、分析を行った。本稿では、スルセルヴァ方言と同じロマンシュ語に属するヴァラーデル方言を比較対象として、坂口 (2014)と同様の手法によって助動詞の勾配について考察を行う。

2. 調査前

本章では、調査前の段階について述べる。一節では本稿の問題提起を述べ、二節では Legendre (2007a)の ASH の枠組みやそれに付随するを概観し、三節では本稿の調査方法を提示する。

2.1.

本節では、本研究の問題提起について述べる。

一点目は、ロマンシュ語の助動詞 HAVE と BE の分布はどのようなものであるか。二点目は、ASH においてロマンシュ語の Split Intransitivity の cut-off point⁵⁾はどこにあるのか。三点目は、両方言の助動詞の勾配の差異並びにその原因はどこにあるか、本稿では以上三点をコーパスのデータを参照し考察する。

2.2.

本節では、ASH を概観しフランス語及びイタリア語の助動詞の分布を見ていく。以下の表は、フランス語及びイタリア語における ASH を示したものである。(表 1)

| 動詞のクラス | サブカテゴリー | | フランス語 | イタリア語 |
|---------------------------|--|---------------|---------|---------|
| 1) change of location | | arrive | BE | BE |
| | | come | BE | BE |
| | | die | BE | BE |
| 2) change of state | a) change of condition | appear | BE/HAVE | BE |
| | b) appearance | disappear | BE/HAVE | BE |
| | | go up | BE/HAVE | BE |
| | c) indefinite change in a particular direction | go down | BE/HAVE | BE |
| | | wilt | HAVE | BE |
| | | worsen | HAVE | BE/HAVE |
| 3) states | a) continuation of pre-existing state | last | HAVE | BE/HAVE |
| | b) existence of state | be (location) | HAVE | BE |
| | | exist | HAVE | BE/HAVE |
| | | suffice | HAVE | BE |
| 4) uncontrolled processes | a) emission | resound | HAVE | BE/HAVE |
| | b) involuntary actions | skid | HAVE | BE/HAVE |
| | c) bodily functions | sweat | HAVE | HAVE |
| 5) controlled processes | a) motional | swim | HAVE | BE/HAVE |
| | b) non-motional | work | HAVE | HAVE |
| | | yell | HAVE | HAVE |

表 1 フランス語及びにイタリア語/助動詞の選択 (Legendre, 2007a)

Legendre (2007a)では、母語話者⁶⁾の容認度を基準に、表 1 のように 1) change of location、2) change of state、3) states、4) uncontrolled processes、5) controlled processes の五つの動詞クラス⁷⁾に分類した。加えて、五つの動詞クラスを表 1 に示すようなサブカテゴリー⁸⁾に細分した。動詞のクラスが一番上に位置する change of location は助動詞 BE を、一番下に位置する non-motional controlled processes は助動詞 HAVE を頻繁に取る core verbs とした。core verbs とは、一番上位に位置する 1) change of location、並びに一番下位に位置する 5) controlled processes の b)non-motional の動詞を指す。core verbs 以外の周辺の動詞を non-core verbs とした。core verbs は文に表れる副詞などのアスペクトに影響を受けず、一貫して助動詞 BE または助動詞 HAVE を選択する。これに対して、non-core verbs は文に表れる副詞などのアスペクトの影響を受けやすく助動詞 BE と助動詞 HAVE の選択の揺れ⁹⁾があることが確認されている。

さらに、Sorace (2000)は助動詞 BE から助動詞 HAVE に切り替わる境界を cut-off point¹⁰⁾と呼んだ。この cut-off point は言語によって異なる。表 1 に示すように、フランス語では動詞 die¹¹⁾(死ぬ)と動詞 appear (現れる)の間が、イタリア語では動詞 wilt (枯れる)と worsen (悪化する)の間がそれぞれ cut-off point である。

2.3.

本節では、調査方法について述べる。言語資料には、地方紙 *La Quotidiana*¹²⁾ のアーカイブを用い、検索範囲を 1996/7/1 から 2012/10/31¹³⁾ までとした。検索事項は、ロマンシュ語 スルセルヴァ方言並びにヴァラーデル方言の三人称単数男性形及び女性形と自動詞の過去分詞の組み合わせに限定した。集計時には、助動詞 BE または HAVE のどちらかと共起している例文を抜き出し分析を行う。加えて、ヴァラーデル方言の受身形 *gnir* (来る) + 過去分詞の形を除外対象とした。以上のように検索事項を限定した上で、出現しうるものすべてを調査した。以下、スルセルヴァ方言の助動詞の選択を表にしたものである。(表 2、坂口、2014)

| 動詞のクラス | サブカテゴリー | 動詞 | スルセルヴァ方言 |
|---------------------------|--|---------------|----------|
| 1) change of location | | arrive | BE |
| | | come | BE |
| 2) change of state | a) change of condition | die | BE |
| | b) appearance | appear | BE |
| | | disappear | BE |
| | c) indefinite change in a particular direction | go up | BE |
| | | go down | BE |
| | | wilt | BE |
| | worsen | BE | |
| 3) states | a) continuation of pre-existing state | last | HAVE |
| | b) existence of state | be (location) | BE |
| | | exist | HAVE |
| | | suffice | HAVE |
| 4) uncontrolled processes | a) emission | resound | BE/HAVE |
| | b) involuntary actions | skid | BE |
| | c) bodily functions | sweat | HAVE |
| 5) controlled processes | a) motional | swim | BE |
| | b) non-motional | work | HAVE |
| | | yell | HAVE |

表 2 スルセルヴァ方言/助動詞の選択

3. ヴァラーデル方言における助動詞の分布

本章では、Legendre (2007a)を参照して ASH の各サブカテゴリーにつき各一文を例示する。紙面のスペースの都合上、ヴァラーデル方言の例文のみを掲載する。スルセルヴァ方言の例文については坂口 (2014)を参照。加えて、そのサブカテゴリーに属する動詞が、助動詞 HAVE または BE のどちらを選択するかについて述べる。1 節では 1) change of location を、2 節では 2) change of state を、3 節では 3) states を、4 節では 4) uncontrolled processes を、5 節では 5) controlled processes について概観し考察する。

3.1.

本節では、1) change of location のカテゴリーについて考察する。ここでは、動詞 rivar (到着する)と動詞 gnir (来る)の二つの動詞について調べた。その結果、動詞 rivar (到着する)は助動詞 BE を、動詞 gnir (来る) は助動詞 BE と HAVE を取ることが分かった。(例文(1), (2), (3))

(1) Il pair da la Val Müstair es rivà a Zernez...
the farmer from the Val Mustair BE arrived at Zernez¹⁴⁾
ヴァル・ムシュテールから来た農民はゼルネツに到着した。

(2) Flurin Bezzola... ha gnü a Müstair üna radunanza...
Flurin Bezzola HAVE come to Mustair an assembly
フルリン・ベッツオーラはムシュテールの会合に来た。

(3) El es gnu a Tschlin a dumandar ...
He BE come to Tschlin to ask
彼は質問するためにチュリンに来た。

3.2.

本節では、2) change of state のカテゴリーについて考察する。まず同カテゴリー内の change of condition において、動詞 murir (死ぬ)、動詞 cumparair (現れる)、動詞 svanir (消える)の三つの動詞について調べた。三つの動詞すべてにおいて、助動詞 BE を取ることが分かった。(例文(4), (5), (6))

(4) Cla Biert es mort dal 1981...
Cla Biert BE dead from/the 1981
クラ・ビエルトは1981年に亡くなった。

(5) Il cudesch es cumparü pro la chasa editura Desertina...
the book BE appeared by the house editorial Desertina
その本はデセルティナー社から出版された。

(6) Ella es svanida in sia stanza...
she BE disappeared in her room
彼女は彼女の部屋で消えた。

次に、同カテゴリー内の *indefinite change in a particular direction* について述べる。ここでは、動詞 *ir sü* (上る)、動詞 *ir giò* (下る)、動詞 *sflurir* (枯れる)、動詞 *as pegiorar* (悪化する) の四つの動詞について調べた。動詞 *as pegiorar* 以外は助動詞 BE を取ることが分かった。(例文(7), (8), (9), (10))

(7) *La grupp d'Ardez es ida sü sur Munt*
the group of/Ardez BE gone up on Munt
アルデス地方の一行はミュントを上がっていった。

(8) *El es i giò Turich a frequentar la scoula d'art...*
he BE gone down Zurich to visit/often the school of/art
彼は美術学校に通うためにチューリッヒに下った。

(9) *Hoz tuottas (rösas) sun sfluridas ün'unica m'es restada.*
today all roses BE withered a/single me/BE remained
今日一本を残して、その他のバラは枯れてしまった。

(10) *...cuntinuaintamaing as vaiva pegiorada la qualità da vita...*
continuously oneself HAVE worsen the quality of life
生活の質は徐々に悪化した。

3.3.

本節では、3) *states* のカテゴリーについて考察する。同カテゴリーのサブカテゴリーである *continuation of pre-existing state* の四つの動詞、動詞 *dürar* (続く)、動詞 *star* (いる)、動詞 *existir* (存在する)、動詞 *bastair* (十分である) を調べた。その結果、動詞 *dürar* (続く) は助動詞 BE と HAVE を取り、動詞 *star* (いる) は助動詞 BE を取り、動詞 *existir* (存在する)、動詞 *bastair* (十分である) は助動詞 HAVE を取ることが分かった。(例文(11), (12), (13), (14), (15))

(11) *Imboden sa cha la via es düra...*
Imboden know that the life BE lasted
インボーデンは命が続いたことを知っている。

(12) L'auazun ha dürà nouv uras.
the/flood HAVE lasted nine hours
洪水は九時間の間続いた。

(13) Lansel es stat ün dals plü importants exponents...
Lansel BE remained one of/the more important exponents
ランセルは最も重要な指導者の一人であった。

(14) Il port... ha existì fin il 1861.
the harbour HAVE existed end the 1861
その港は 1861 年の終わりまで存在した。

(15) Lur lingua ha bastà per gudagnar il paun...
their language HAVE sufficed for earn the bread
彼らの言語はパンを得る（生計をたてる）には十分であった。

3.4.

本節では、4) uncontrolled processes のカテゴリーについて考察する。同カテゴリー内の emission の項目から動詞 resunar (鳴り響く)を、involuntary action では動詞 sglischar (震える)を、bodily functions では動詞 süar (汗をかく)について調べた。その結果、動詞 resunar (鳴り響く)は助動詞 HAVE を、動詞 sglischar (震える)は助動詞 BE を、動詞 süar (汗をかく)は助動詞 HAVE を選択することが分かった。(例文(16), (17), (18))

(16) Las sirenas... han resunà trais giadas durant ina minuta.
the alert HAVE sounded three times during a minute
警報は一分間の間に三度鳴った。

(17) Cuort davo las 16.30 es sglischi oura ün dals alpinists...
short after the 16.30 BE shivered out one of/the alpinists
16時半を少しすぎた頃に一人の登山者が震え始めた。

(18)...umens... han suà da gudagnar raps.
men HAVE sweat to earn small changes
人々は小銭をかせぐために汗を流した。

3.5.

本節では、5) controlled processes のカテゴリーについて考察する。同カテゴリーの motional では動詞 nodar (泳ぐ)を、non-motional では動詞 lavurar (働く)と動詞 sbragir (叫ぶ)を調べた。その結果、動詞 nodar (泳ぐ)は助動詞 BE を動詞 lavurar (働く)、動詞 sbragir (叫ぶ)は助動詞 HAVE を選択することが分かった。(例文(19), (20), (21))

(19)Truog... es nodà 25 meters in be 11 secundas.

Truog BE swum 25 meters in only 11 seconds

ツロックは25メートルをたった11秒で泳いだ。

(20)Els han lavurà cun grond engaschament...

they HAVE worked with great engagement

彼らは大変熱心に働いた。

(21) «Uossa basta!» ha sbragi la mamma...

now enough HAVE shouted the mother

母は「もう十分だ。」と叫んだ。

3.6.

本節では、3.1.から 3.5.までの結果を以下の表にまとめ、2.1.の問題提起された三点を中心に考察する。以下、ヴァラーデル方言とスルセルヴァ方言の Split Intransitivity をまとめた表である。(表3)

| 動詞のクラス | サブカテゴリー | 動詞 | スルセルヴァ方言 | ヴァラーデル方言 |
|---------------------------|--|---------------|----------|----------|
| 1) change of location | | arrive | BE | BE |
| | | come | BE | BE/HAVE |
| 2) change of state | a) change of condition | die | BE | BE |
| | b) appearance | appear | BE | BE |
| | | disappear | BE | BE |
| | c) indefinite change in a particular direction | go up | BE | BE |
| | | go down | BE | BE |
| | wilt | BE | BE | |
| | worsen | BE | HAVE | |
| 3) states | a) continuation of pre-existing state | last | HAVE | BE/HAVE |
| | b) existence of state | be (location) | BE | BE |
| | | exist | HAVE | HAVE |
| | | suffice | HAVE | HAVE |
| 4) uncontrolled processes | a) emission | resound | BE/HAVE | HAVE |
| | b) involuntary actions | skid | BE | BE |
| | c) bodily functions | sweat | HAVE | HAVE |
| 5) controlled processes | a) motional | swim | BE | BE |
| | b) non-motional | work | HAVE | HAVE |
| | | yell | HAVE | HAVE |

表3 スルセルヴァ方言並びにヴァラーデル方言／助動詞の選択

ヴァラーデル方言では、gnir（来る）より助動詞 HAVE 生じているため、スルセルヴァ方言よりも表の上位の位置で助動詞 HAVE から BE に切り替わる cut-off point が生じているように一見すると思える。しかしながら、本当にそうなのであろうか。gnir（来る）に助動詞 HAVE が伴った原因は、ヴァラーデル方言特有の受身の迂言形 gnir（来る）+ 過去分詞の形から生じていると筆者は考えている。動詞 gnir（来る）を用いた受け身の迂言形を過去時制にする場合には助動詞 HAVE が伴う。したがって、動詞 gnir（来る）を受け身の用法ではなく自動詞として用いた場合であっても、助動詞 HAVE を伴うことが常用化したと考えられる。このように考えると、ヴァラーデル方言の cut-off point は動詞 sflurir（枯れる）と動詞 as pegiorar（悪化する）の間にあるように思える。しかしながら、動詞 as pegiorar（悪化する）の形に注意が必要である。ヴァラーデル方言では、「悪化する」という意味を表す一語動詞が存在しないため、as（自分自身）という再帰代名詞を伴う必要がある。したがって、厳密にはヴァラーデル方言には「悪化する」という形は自動詞ではなく、他動詞と言える。この二点を配慮すると、ヴァラーデル方言の cut-off point は、動詞 as pegiorar（悪化する）と動詞 dūrar（続く）の間にあり、スルセルヴァ方言と同様であると言える。

さらに、ヴァラーデル方言において助動詞 HAVE と BE が対立する文が動詞 gnir（来る）の他に、動詞 dūrar（続く）でも見られた。

(11) Imboden sa cha la via es dūra...

Imboden know that the life BE lasted

インボーデンは命が続いたことを知っている。

(12) L'auazun ha dūrà nouv uras.

the/flood HAVE lasted nine hours

洪水は九時間の間続いた。

例文(11)と(12)を比較すると、例文(12)では nouv uras（九時間）という継続¹⁵⁾を表す副詞を伴っていることが分かる。したがって、例文(12)では継続に強調が置かれている atelic の文章であると言える。例文(11)は副詞が伴っていないため、telic 性を定義するのは難しい。例文(12)は副詞で継続を強調しているため、例文(11)よりも継続の意味合いが強いと考えられる。したがって、この telic 性の強調の違いにより例文(11)では助動詞 BE が、例文(12)では助動詞 HAVE が用いられたと言える。この現象は、スルセルヴァ方言でも同様に確認されている。この現象については、坂口 (2014) を参照。

4. 展望

これまで、自動詞における助動詞の二項対立性についての先行文献、スルセルヴァ方言とヴァラーデル方言におけるコーパスを参照した上でのデータ集め、並びにその分析に時間を費やしてきた。今後は、Perlmutter (1978) の非対格性仮説と Sorace (2007) の Split Intransitivity の関連性について、現在まで集めたデータを活用し説明していきたいと考えている。

注記

- 1) ロマンシュ語にはヴァラーデル Vallader 方言の他に、スルセルヴァ Sursilvan 方言、ストシルヴァン Sutsilvan 方言、スルミラン Surmiran 方言、プテール Puter 方言がある。
- 2) 通言語的に見ると、すべての言語において迂言過去の用法において、助動詞の対立が見られるわけではない。スペイン語では haber (HAVE)、カタルーニャ語では haver (HAVE)、ポルトガル語では ter (HAVE) となり、助動詞 HAVE のみをとる。助動詞の対立が見られる言語は、イタリア語 essere (BE) と avere (HAVE)、フランス語 être (BE) と avoir (HAVE)、ドイツ語 sein (BE) と haben (HAVE) などがある。
- 3) ASH は Sorace (2000) によって発案されたものであるが、本稿では Legendre (2007a) の枠組みを中心に用いる。Sorace (2000) では、自他交替が起こる動詞までも取り扱われているためである。ここでは、自他交替が起こる動詞を排除し調査を進める。
- 4) 以後、助動詞の勾配 Auxiliary Selection Hierarchy の略称である ASH とする。
- 5) cut-off point とは、ASH において助動詞 HAVE から BE に切り替わる場所をさす。
- 6) 主にイタリア語、フランス語、ドイツ語、オランダ語の各言語の母語話者の容認度を参考にしている。
- 7) 動詞クラス及びサブカテゴリーの意味の詳細について、Sorace (2000) を参照。
- 8) 注 6 と同様
- 9) 本稿の 3.6. の動詞 dūrar (続く) の分析を参照。
- 10) Sorace (2004: 262) は cut-off point は言語によって異なるとしている。加えて、cut-off point は core verbs ではなく、non-core verbs にあるとしている。
- 11) Legendre (2007) に則り、動詞を英語で示す。
- 12) ロマンシュ語を研究する上で、唯一利用可能な言語資料である。参考ウェブサイトを参照。
- 13) アーカイブの一番古い記事から、研究の開始までの期間を示す。
- 14) 見やすさを配慮したため、各文の助動詞の部分を太字で示した。
- 15) 本稿では、Sorace (2000) に従い、Tenny (1994:4) の telicity の定義を用いる。下記に示す delimitedness は telicity と同様の意味である。その定義は以下の通りである。
“Delimitedness refers to the property of an event’s having a distinct, definite and inherent endpoint in time.”

参考文献

- Arnovich, Raúl (2007) *Split Auxiliary Selection from a Cross-Linguistic Perspective*. Benjamins.
- Bentley Delia and Eythósson Thórhullar (2003) *Auxiliary Selection and the Semantics of Unaccusativity*. *Lingua* 114.
- Cennamo Michela and Sorace Antonella (2007) *Auxiliary Selection and Split Intransitivity in Paduan: Variation and Lexical-Aspectual Constraints*. *Split Auxiliary Systems. A Cross-Linguistic Perspective*. ed. by Raúl Aranovich. Benjamins.
- Furer, Jean-Jacques (2001) *Vocabulari Romontsch Sursilvan-Franzos*. Fundaziun Retoromana P. Flurin Maissen FRR. Glion.
- Haiman John and Benincà Paola (1992) *The Rhaeto-Romance Languages*. Routledge. London.
- Legendre, Géraldine (2007a) *On the Typology of Auxiliary Selection*. *Lingua* 117. 1522-1540. John Hopkins University. Elsevier B.V.

- (2007b) *Optimizing Auxiliary Selection in Romance*. Split Auxiliary Systems ed. by Aarnovich, Raúl. A Cross-Linguistic Perspective. Benjamins.
- Loporcaro, Michele (2010) *Two Euroversals in a Global Perspective: Auxiliation and Alignment 1*. Walter de Gruyter.
- (2007) *On Triple Auxiliation in Romance*. *Linguistics 45-1*. Walter de Gruyter.
- Mateu, Jaume (2009) *Gradience and Auxiliary Selection in Old Catalan and Old Spanish*. Oxford University Press.
- Perlmutter, David M. (1978) *Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis*. 157-190. Proceeding of the 4th annual meeting of the Berkeley Linguistics Society.
- Pulman, Stephen (1997) *Aspectual Shift as Type Coercion*. Transaction of the Philological Society 95.
- Sorace, Antonella (2000) *Gradients in Auxiliary Selection with Intransitive Verbs*. Language volume 76-4. 859-890. University of Edinburgh.
- (2004) *Gradience at the Lexicon-Syntax Interface: Evidence from Auxiliary Selection and Implications for Unaccusativity*. The Unaccusativity Puzzle. Explorations of the Syntax-Lexicon Interface. ed. by Artemis Alexiadou, Elena Anagnostopoulou and Martin Everaert. Oxford University Press.
- Spescha, Arnold (1989) *Grammatica Sursilvana*. Casa editura per mieds d'instrucziun.
- Strebel, Barbara (2005) *Il Riflessivo in Soprasilvano: Indagine di Morfosintassi Sincronica e Diacronica*. Romanisches Seminar der Universität Zürich.
- Tenny, Carol (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Kluwer.
- 坂口 友弥 (2014) 「ロマンシュ語スルセルヴァ方言の助動詞の選択性-フランス語とイタリア語との対称、並びにコーパス調査とアンケート調査を通して-」、『ニダバ』第43号、西日本言語学会

参考ウェブサイト

- <http://www.udg.ch/dicziunari/> (ドイツ語/ロマンシュ語ヴァラーデル方言辞書)
- <http://www.suedostschweiz.ch/> (地方紙 La Quotidianna)